

大西秀之著

『技術と身体の民族誌——フィリピン・ルソン島山地民社会に息づく民俗工芸——』

昭和堂 2014年 xiv+274+viページ

あずま けん たろう
東 賢 太 朗

「技術」といえば、一方では現代社会において私たちの生活に大きな影響を与え、社会のあり方を変容させ、また新たな問題を生み出す近代テクノロジーや科学技術を想起する。他方、現代社会のみならず、人類史全体を通じて「技術」が与えた影響や果たした役割を考えれば、その問題は幅広く人類文化全般に通じるものだといえよう。本書は、そのように古くて新しい重要なテーマである「技術」を対象とした、人類学からの取り組みである。

第1章の冒頭で、著者は、民族誌記述のかんりの部分は、「現地の人びとの技術的実践の記録である、といっても決して過言ではない」（2ページ）にもかかわらず、人類学における技術的実践の理解は他の研究領域に比べ、後れを取っていると指摘する。人類学における技術研究の後れは、技術が物質文化の一部であるとみなされたことに起因している。物質文化は人類学の学説史で批判的となる社会進化論や文化伝播論の対象となってきたこと、また人文社会科学における心身（物心）二元論への認識論的批判から否定的に捉えられがちであった。また、構造機能主義以降、モノを研究対象とすることに積極的であった象徴人類学やフーコー流の言説分析においても、モノは言語コードや言説との関係において対象となり、非言語的な側面は忘却されていく。さらに著者は、モノの民族誌記述に対し、決定的な影響を与えた思想的潮流としてポストモダニズムを挙げている。人類学のポストモダニズム思想への呼応は、「言語論的転回」という認識論を受け入れ、モノとヒトとの関係性を言語的世界、すなわち

民族誌テキストの内部に閉じ込め、人類学の「レゾナデートル」としての現地調査から遠ざけてしまう危険性を内包していた。

しかし、どれほど言語にモノの根拠を求めてみても、日常世界のリアリティや民族誌フィールドでの参与観察においては、モノの非言語的側面を完全に捨象することはできない。著者の問題意識は、非言語的側面を含めたモノとヒトとの関係性を追求することにある。行為者自身すら言語化しえない実践が産出する諸事象から、その実践が反映される程度や実践の遂行の成否を、トートロジーに陥ることなく個別具体的な事例から明示するためにはどうすればいいのか。物理的環境のなかの特定のモノに働きかける実践には、文化的コードを共有する当事者であれ、していない局外者であれ、その成否を判断する可能性が残されている。そこから、対象を生業／生産活動の非言語的領域に定め、モノに刻み込まれたヒトの非言語的実践として技術を読み解く、という本書の視座が導かれる。

第3章以降では、民族誌データが提示されている。ルソン島北部コルディエラ地方のピラ村という一村落では、総世帯数の大部分が専業農家であり、乾季の農作業の合間に行われる自家消費や現金獲得を目的とした副業として土器作りが行われている。村内の現役の土器製作者16名はすべて女性であり、土器作りは「女の仕事」として認識されてもいる。また、土器作りの工具や工程の数には、製作者による差異がみられない。唯一顕著な違いが見出されるのは、複数の製作者が一軒の作業小屋に集まるか、個々人が自分の家で1人で行うかという作業形態の違いのみである。

ピラ村の土器製作者すべてに共通する作業は、15の行程に区分されている。粘土の採集から内面への樹脂塗装まで、各工程の聞き取り、観察、著者の参加による個人的経験の詳細な記述を読み解くことから明らかになるのは、ピラ村の土器作りの技術的実践が、かなりのレベルでの知識と技能の熟練を要するものであるということである。それら知識と技能は、言語化による説明が容易ではなく、経験による身体感覚の体得を必要とする。また数値や言語によるマニュアル化が可能であると思われる場合でも、それらは行われずその場その時の素材や工具など、状況や条件に応じて作業は行われていた。そこか

ら、ピラ村の土器製作者の身体所作は、文化的背景に規定され構築された知識と技能と不可分の関係にあり、その繰り返しのよって「正しい」方法が継承されているということが指摘される。

第4章は、同じくピラ村の土器作りの事例から、技術的実践の非言語的領域が、いかなる社会的・文化的環境から成立し、また社会的・文化的役割を担っているのか、とくに土器製作者の学習・習得過程とジェンダーの再生産の関係について検討されている。ピラ村の土器作りでは、実践されている技術の斉一性が非常に高く、製作者ごとの偏差がほとんどみられない。作業の手順や工具の使用法に加え、作業姿勢や身体所作にいたるまでその傾向は顕著である。製作者によって定式的な身体所作が共有されており、そのことによって製作される土器にも共通した属性が付与され、また土器自体のプロポーシオンや器厚の均質性が保たれている。著者は自身が土器作りに参加したときに、製作者と異なった作業姿勢や身体の使い方をするとつねに注意を受けたこと、また一定の器厚に仕上げるためどの程度粘土を削るのか、目的のサイズの土器を作るため粘土をどの程度手に取ればいいのか、「見極め」ることができなかったことなどを例に挙げている。さらにそれら知識と技能はただ経験を通じて身体に習得されるのみならず、その場その時の変化する状況に対処すべく、つねに「書き換え」られる動的なものでもある。

そのようにマニュアル化が不可能であり、経験を通じてしか学ぶことができない土器作りの技術伝承プロセスは、誰から、どのようにして「体得」されていくのだろうか。ピラ村においては、知り合いの熟練者と一緒と同じ作業をするなかで、見よう見まねで学びとるという習得過程がみられるという。製作者は幼少期に粘土遊びや土器作りの手伝いを経験し、またともに作業するなかで熟練者に必要に応じて尋ねながら、近代学校教育とは異なるある種の実践コミュニティのなかで学習していくのである。そのような過程で習得される土器作りの技術とは、ピラ村が属するカンカナイ社会の社会的要請と文化的環境を、製作者の身体が受け継ぐことだと言い換えることもできる。そのことを最もよく表しているのが、「女の仕事」と認識される土器作りをめぐるジェンダーの再生産である。幼少期の粘土遊びや土

器作りの手伝いには、男女の性別にかかわらず子どもが参加するが、成長過程において次第にそれぞれのジェンダーを意識した性別分業が明確化していく。土器作りに特有の姿勢や動作は、カンカナイ社会において「女らしさ」を象徴する身体表現として認知されており、またそのような認知によってジェンダーが再生産されるという相互補完的な構造がみられるのである。土器作りの習得という技術的実践は、土器という物質を作り出す身体を生み出す場であると同時に、ジェンダーという意味の再生産の場でもある。

第5章では、ルソン島北部コルディエラ地方において山地民の代表的な「伝統工芸」とされる機織りを対象とする。コルディエラ行政区マウンテン州のサガダとサバガン、サモキの3地域はそれぞれ、機織りが盛んな地域であるが、サガダにはサガダ・ウィービングという産業化し経済的な成功をおさめた工房、サバガンにはサバガン織工協同組合というある程度産業化した工房があり、サモキでは個人や家族単位での機織りがみられるのが特徴である。サガダ・ウィービングとサバガン織工組合では「高機」による織布の生産とミシンによる加工が、すべて女性からなる織工によって行われている。その技術習得の過程では、「訓練」による近代学校的教育に類似した学習システムがみられる。サガダとサバガンの違いは、前者の織工が全員常勤雇用であるのに対し、後者がパートタイム的な就労形態だということにある。他方、サモキには工房はなく機織りは個人的に行われている。そこで用いられるのは「高機」よりも簡素かつ生産性は低いながらより高度な熟練を要する「腰機」であり、その技術伝習は熟練者から観察や質問によって学びとる実践のなかで行われる。

これら産業化の程度がそれぞれ異なる3地域の機織りの比較から、機織りの産業化による影響として、(1)工房による空間の組織化の度合い、(2)就労形態の差異、(3)技術伝習の形態の相違が挙げられている。また一方で、3地域の産業化の進展にかかわらず、機織りはすべて女性によって行われるという性別分業は共通しており、観念的かつ身体的なレベルでのジェンダーの再生産は現時点では維持されている。著者は今後、産業化のさらなる進展と近代学校的な教育システムの浸透により、同地域における機

織りのジェンダー再生産役割は果たされなくなるのではないか、という可能性を示唆している。

第6章では、コルディエラ山地民の「伝統工芸」としての機織りと、市場経済との関係について論じられている。非西欧社会における生活財としての工芸品は、植民地主義の時代を経て、現代国際社会の市場経済において「商品」として売買されている。コルディエラ山地民の機織りも例外ではなく、生産された織布・織物製品がフィリピン国内の都市部や海外マーケットにおいて商品として流通している。またそれら織物製品の多くは、「伝統工芸」という付加価値をまといながら、実際はマーケットのニーズを意識して製作された「新製品」である。このような、都市部や海外のマーケットにおける織物製品の「商品」としての流通は、1995年に世界文化遺産に指定され、その後2001年に危機遺産リストに登録される、コルディエラの棚田群の国際観光地としてのあり方とも深く関連している。

続いて、コルディエラ山地民社会マウンテン州から、前章までの調査対象地であったサガダ、サバガン、サモキ、ビラ村での機織り、および比較対象としてバギオ市とイフガオ州バナウエの機織りについて、それぞれ生産と流通の事例が示される。とくに、工房がなく非常に小規模に個人レベルで機織りが行われる「伝統的」なビラ村の機織りが、素材の供給という点において外部マーケットとの関係を維持していること、観光地であるバギオとバナウエが外部社会との接触の頻度が高くよりマーケットのニーズに敏感に反応していることが、マウンテン州との比較において特徴的である。この、コルディエラ山地民社会の「伝統的」な村落から観光地まで、異なる規模の生産と流通の事例を通じて、一貫して外部のマーケットとその背後にある外部社会や市場経済との関係が不可欠であること、また同時に、それら外部と接合したコルディエラ山地民の機織りが「伝統工芸」として認知されており、そのことによってむしろ市場経済のなかで流通する付加価値を高めていることが指摘されている。それは、産業化や市場経済との接合により「伝統工芸」が衰退するという単線的な流れではなく、むしろそのことによって機織りが維持、再生産され、そのなかに人びとが主体的に巻き込まれていく状況であると著者は読み解いている。

第7章では、技術研究について①「民族誌フィールド」、②「社会理解」、③「社会科学」という3つの視座からの結論が示される。①知識と技能は一体として不可分に存在するケースから、個別独立的に存在するケースまで、知識の言語化の度合いに応じて確認できる。その分離の度合いは、産業革命以降の近代社会に大幅に促進したが、しかし腰機と高機の操作に必要とされる知識と技能の差異のように、非／前近代的技術社会においても生じうるものである。本書で試みた、モノに刻み込まれた技術的実践の非言語的領域へのアプローチから、それぞれの社会における言語化可能な「知識」と言語化を前提としない身体能力としての「技能」の関係性のあり方を問い、民族誌フィールドから近代社会を相対化する可能性が展望できる。②近代社会における技術の性格とあり方は、知識と技能の分離によって技術がマニュアル化や言語化されてきたことに特徴づけられる。しかし、言語化が困難な技能は、日常の社会生活において、さらには最先端テクノロジーが用いられる場においても名人芸や職人技として介在しており、知識と技能のせめぎ合いは現代社会においても継続している。そこから、民族誌フィールドにおける近代テクノロジーの再検討が可能になる。③開発や近代化による個人の実践の変容、その意図的や直接的な影響のみならず、意図も予期もできない間接的な動作の連鎖と影響を民族誌フィールドにおいて丹念に読み解く技術研究は、現代社会で圧倒的な影響力をもつ各種の科学技術が、どのように民主主義によってコントロール可能／不可能なのか、技術へのリテラシーを高めつつ技術と社会の関係を追求する社会科学においても重要な貢献を果たすであろう。

最後に評者の立場から2点のコメントを述べておく。本書が人類学の「レゾンデートル」である現地調査を重要視し、民族誌データを十分に含むものであることに疑いはない。しかしながら、あとがきで著者自身も述べているように、その調査はさまざまな制約と状況の変化のなかで、大部分が10年以上前に行われたものである。とくに、土器作りに直接参加した期間が2カ月間（138ページ）であったことは、たんに調査期間の多寡を超えて、技術と身体の問題意識との整合性を問われうる。著者が土器作り

の工程で繰り返し「そんなやり方ではできない」と「間違い」を指摘される経験は、土器作りの身体所作が文化的背景に規定され継承された「正しい」方法によるものであることを、観察や聞き取りではなく体験から逆照射している。では、その「正しい」方法を著者がより長期間のうちに体得していたとしたら、どうであったか。現地調査が人類学の「レゾナント」であることにおおいに賛同しながら、その意義は完全に同化も異化もできない他者との関係性のなかに、何かしらの共同性が生じる特殊な時空間の体験にあると評者は考えている。土器作りのさらなる習得過程のなかで、著者は土器作りの非言語的領域における身体所作や感覚のあり方、他者の（異）文化的背景の継承の可能性、さらには身体を通じた実践の共同性について、より深い考察を導いたのではないだろうか。

もう1点は、本書における言語的領域と非言語的領域、あるいは言語と実践についての二元論的にも思われる前提についての疑念である。本書のいたるところで、技術的実践の非言語的領域の解明が言語的アプローチに依拠する、あるいは言語的領域に

よって裏づけられる状況が散見される。たとえば上述の土器作りにおける「そんなやり方ではできない」という著者への土器製作者の発言は、文化的に構築された「正しい」身体技法が伝承されていることを逆説的に示すものであった。その他、土器作りの身振りが「女らしさ」を象徴するという想定は、著者の腰掛けの座り方が「女のようだ」（135ページ）と揶揄されることによって裏づけられ、機織りについても近代学校的な教育と民俗社会的な技術伝習の2つの学習システムは、織工たちの「訓練された」という受動的な言葉と、「学びとった」や「観察を通して」という積極的な表現の対比（169ページ）に表れている。メタレベルで考えれば、そもそも非言語的領域へのアプローチの重要性について、これほどまでに精緻な論理によって言葉を尽くし言語への偏重に警鐘を鳴らす本書の民族誌データは、なにも非言語的領域のみで構成されているのではなく、むしろ言語と非言語、あるいは言語と実践の二元論を乗り越えた相補性（176ページ）のうちに再度、位置付けられうるのではないだろうか。

（名古屋大学大学院文学研究科准教授）